

平成16年7月8日
農林水産省 生産局

家畜の改良増殖目標についての研究会（豚）の概要について

下記のとおり、家畜の改良増殖目標についての研究会（豚）が開催されました。

記

1. 日時

平成16年7月6日（火） 13:30～16:40

2. 場所

東京都千代田区霞が関1-2-1
農林水産省本館2階生産局第1会議室

3. 出席者

委員：別紙 [\[PDF\]](#) のとおり

4. 議事概要

研究会の座長に阿部委員が選出され、事務局より配付資料の説明が行われた後、意見交換が行われました。委員からの主な発言は以下のとおりでした。

改良目標を作成し、それを達成するに当たり、どこの機関が具体的にどういう取り組みで行っていくのかについても検討すべき（民間だけでは難しく、国、県等の公的機関と連携する必要あり）。

改良の方向性を示す目標であれば、肉質等に重点を置くのではなく、従来通り、産肉性、繁殖性等の改良を基本とすべき。

食品残さ等の飼料の利用に関しては、中ヨークシャー種等の方が適していると考えられるところであり、こうした遺伝的多様性の確保、すなわち多品種の活用を図ることは食料自給率向上の観点からも重要。

米国等においても以前は筋肉内脂肪を減らす改良を行っていたが、最近では、おいしさを重視する消費者のニーズ等から、筋肉内脂肪含量の高い豚肉が好まれている。

背脂肪の極端に薄いものが増加しており、枝肉格付けの格落ちの原因となっている。具体的な目標値の設定においては、こうした事情についても考慮すべき。

背脂肪の厚さについては筋肉内脂肪と相関があり、おいしさを表すものとして考えられているため、これを薄くしていくことは消費者の嗜好に合わせた改良の方向として好ましくなく、背脂肪の厚さの改良目標については現状程度とするのが適当ではないか。

ロースの太さについては、太ければ良いというものではなく、改良目標については現状程度で十分ではないか。

肉質に関する育種改良を進めるに当たり、簡易・迅速な肉質分析法の確立とともに、分析を行うための体制の強化が必要。

繁殖能力については、改良の進みにくい分野であり、遺伝的能力評価等を活用した効率的な改良を進めることが必要。また、そうした改良を進めるための関係機関による検討会等を開くことが必要。

年間分娩回数については、呼吸器病等の影響により低下している状況にあるが、遺伝的能力とは別次元の話であり、前回の目標より下げるといった状況にはない。

トレーサビリティ、HACCPへの対応等、安全・安心が重視されており、飼養・衛

生管理面についても重視していくべきではないか。

問い合わせ先

〒100-8950 東京都千代田区霞ヶ関1-2-1

生産局 畜産部 畜産振興課

山本、寺井、武久

Tel 03-3502-8111 (内線3915, 3916)

03-3501-3777 (直通)

Fax 03-3593-7233

「家畜の改良増殖目標についての研究会(豚)」出席委員
(敬称略、五十音順)

- 阿部 亮 日本大学 生物資源科学部 動物資源科学科教授
- 家入 誠二 熊本県農業研究センター 畜産研究所研究参事
- 石井 和雄 (独)農業・生物系特定産業技術研究機構
畜産草地研究所家畜育種繁殖部家畜育種研究室
主任研究官
- 入江 正和 国立大学法人宮崎大学農学部食料生産科学科教授
- 岡島 徹 (社)日本食肉格付協会規格一課長
- 尾形 眞二 (社)日本種豚登録協会 常任理事
- 鹿又 巖一 (独)家畜改良センター茨城牧場長
- 坂井 達弥 全農 畜産生産部 生産基盤対策課 課長
- 吉田 小夜子 養豚自営業

(計9名)

(○は座長)